

付属と誓言

庵 谷 行 亨

宗教の特性を如実に表わしている。

このように、釈尊の教えは主体的に実践していく自覚者の出現によって実現されていくのであり、釈尊はこれを付属の儀を通して滅後に托されたのである。

二

如来滅後の法華経付属は神力・属累の両品に明確である。とくに神力品は、地涌の大菩薩の誓願を受けて、滅後の弘経を結要付属されたもので、この誓願と付属に如来の未来が托されたのである。

日蓮聖人は如来滅後末法時の法華経を、特に法師・宝塔・涌出・寿量・神力・属累の諸品に信認された。『新尼御前御返事』に説示された「宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯し、神力品属累に事極て候し」の文を、教学上、起顕竟の法門と称していることは周知の通りである。

法師品は迹門流通分の始まりで、如来滅後の法華経受持が

一
釈尊は滅後の法華経弘通を本化の大菩薩に付属された。日蓮聖人は、この付属の儀に臨んで発せられた大菩薩の誓願（当広説此経）を自己に帶し、法華経弘通に生涯を捧げられた。

付属とは如来が如来の未来を他者に托することである。したがって被付属者は如来の信を得た者でなければならない。如来の信を得た者とは如来の信に生きる者である。如来滅後の仏法はこのような如来の信に生きる自覚者によって荷われていく。

日蓮聖人の宗教は、釈尊の教えに位置づけられた自己を知ることから出発すると言っても過言ではない。法華経の信受は、与えられたものの受領ではなく、釈尊の教えに自覚的に参与することである。「日蓮なくば此一偈の未来記は妄語となりぬ⁽¹⁾」という『開目抄』の言表は、そのような日蓮聖人の

説かれてゐる。方便品から授學無學人記品にいたる三周說法において、在世の衆生を教益し給うた釈尊は、法師品より滅後の衆生に思ひをいたされ、三説超過の法華經を五種にわたつて修行する法師は如来所遣の使であることを明かされたのである。

滅後弘經の困難性を「況滅度^③後」の四文字に予言された釈尊の御意の内を推された日蓮聖人は、度重なる大難を経文色読の自己の身に主体化し、自らを滅後の如来使に擬せられたのである。

法師品に、滅後弘經者のあり方を明示された釈尊は、続いての見宝塔品において、宝塔の涌出と多宝如来の出現をもつて「付属の大事^③」を説かんとされたのである。

見宝塔品は、天台大師の巧釈に見られる通り、音声を出して迹門の真実を証し、塔を開いて本門を起こされたもので、迹門の法門の結実と本門の法門の緒を開く重要な役割をになっている。開塔に本門をみた天台大師は、「須集^③分身^③明^③レ玄付属^③。声徹^③三方^③召^③三本弟子^③論^③於寿量^③。」と釈して、本門の法門の開顯と同時にそこに付属の問題を予見されている。迹門流通分に、やがて顕発される本門の法門と付属の重大性を見通した天台大師の釈を受けて、日蓮聖人は見宝塔品を「寿量品の遠序^③」とみ、ここに本門の法門の「起」を論じられたのである。

虚空會上、二仏並坐の釈尊が、開口一番大音声を以て普く四衆に告げ給うた三度にわたるお言葉^③を、「第一の敎宣なり」「第二の鳳詔也」「第三諫敎也」と受けとめられた日蓮聖人は、これを天台大師の釈にならつて、「本弟子下方^③」（遠令有^③在^③）への勅宣と信受され、如来神力品における誓願と結要付属の端緒とみなされたのである。

従地涌出品の大菩薩の涌出は、天台大師の見宝塔品釈に予め会釈された如く、滅後弘經の大任を荷うべき如来使の出現である。天台大師は他方の弘宣拒否と涌出の召出を「止召六義^③」をもつて釈し、「聞^③命故来、弘^③法故来、破^③執故来、顯^③本故来^③」と、やがて説示される神力品を先取りした形で地涌千界の滅後弘經を論じられている。

如来寿量品の久遠開顯は、従地涌出品に顯説された「久遠敎化の弟子」に対する疑問の追究がその発端となっている。本門正宗分の幕あけとなつた涌出品の略開近顯遠の敎説は、弥勒をはじめとする無数の菩薩に深い疑惑を生ぜしめた。この疑念を父少子老の難信^③として釈尊に回答を求めたことが、寿量品の説法を起こすのである。釈尊はこの疑念に答えて三誠し、弥勒等の菩薩大衆の三請を受けて自らの本地を顕発された。久遠敎化の弟子を出して後に、自らの本地を明かされたのは、未曾有の法門の開顯には衆生の信が堅固でなければならぬからである。弟子の久遠は師の久遠である。師の久

遠が明かされれば弟子の久遠は自ら領解される。

能説の仏が久遠であれば所説の教法もまた久遠である。久遠の釈尊は三世にわたって衆生を教益し給う。仏寿の久遠は法の常住を意味している。この久遠の法が久遠の弟子に付されたのが如来神力品の結要付属である。

如来神力品は地涌の大菩薩の誓願から始まる。天台大師はこれを「発誓弘經」と釈されている。すでに涌出品において、釈尊は他方の菩薩の弘經を制し、その理由として、「我娑婆世界自有三六万恒河沙等菩薩摩訶薩。一一菩薩各有三六万恒河沙眷属。是諸人等能於我滅後護持誦誦此經」と説かれたのである。涌出品における地涌の如来滅後の弘經は釈尊の予定の世界である。それは単なる予定ではなく、釈尊における當為としての予定である。その意味においては、神力品の結要付属は釈尊における予定の実現と見ることができよう。釈尊が予定された「付属の大事」を成就せしめるのは神力品冒頭の誓願にほかならない。

世尊、我等於三仏滅後世尊分身所在国土滅度之處、當三広説此經。所以者何、我等亦自欲得是三眞淨大法、受持誦誦解説書寫而供養之¹⁰⁰。

この地涌の大菩薩の誓願を、天台大師は「弘經為三。一時節、仏滅後是也。二処所、分身等因是也。三誓願、非但奉^レ命益^レ他、亦自願^レ此眞淨大法。兼濟俱美」と、時・処・

誓願の三に約して釈されている。日蓮聖人はこれを受けて、時は「仏滅後末法初」、処は「法華經有縁の国」であるとし、末法の今時、法華經有縁の国に法華經を弘通すべく「誓った人」と「誓った事実」をことさら重視されたのである。天台教学には、なぜ久成の法が地涌の大菩薩に付属されたかを会する釈が多い。例えば天台大師は師弟、妙樂大師は親子、道暹は法と人の関係でそれぞれこの問題を論じられている。日蓮聖人遺文中にも諸所にそれら諸先師の釈文の引用が見られるが、日蓮聖人の関心は、「なぜ」ということより、むしろ地涌の大菩薩が誓ったという「事実」にあったように思われる。『觀心本尊抄』には「如是高貴大菩薩約三三仏受^レ持之。末法初可^レ不出^レ歟」と強い筆勢で「誓願の事実」を明示されている。

地涌の大菩薩の誓願は三仏の面前における決意の表明である。久遠実成の本師釈尊、および令法久住の故に來至し給うた分身諸仏と法華証明の多宝如来の三仏は、久成の法の所有者であり、当体であり、主体者である。その三仏の面前における誓いは、三仏への全身全霊の帰命を意味する。日蓮聖人はこれを「約足三仏受持之」と表現されたのである。

地涌の大菩薩の誓言を聞き給うた釈尊は即座に十神力を現じられた。天台大師が「為^レ付^レ属深法現^レ十種大力」と釈された通り、釈尊は「若我以^レ是神力於^レ無量無辺百千万億

阿僧祇劫⁽²³⁾為^レ三屬累⁽²⁴⁾故說^レ此經功德⁽²⁵⁾猶不能^レ尽⁽²⁶⁾」と述べ給うた次に、

以^レ要言⁽²⁷⁾之、如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切秘要之藏、如來一切甚深之事、皆於^レ此經⁽²⁸⁾宣示顯說⁽²⁹⁾

と、四句の要法を説いて上行等の地涌の大菩薩に結要付属されたのである。天台大師はこの文を「結要有⁽³⁰⁾四句。一切法者一切皆仏法也。此結⁽³¹⁾一切皆妙名⁽³²⁾也。一切力者通達無礙具⁽³³⁾八自在⁽³⁴⁾。此結⁽³⁵⁾妙用⁽³⁶⁾也。一切秘藏者徧⁽³⁷⁾一切処⁽³⁸⁾皆是実相。此結⁽³⁹⁾妙体⁽⁴⁰⁾也。一切深事者因果是深事。此結⁽⁴¹⁾妙宗⁽⁴²⁾也。皆於^レ此經宣示顯說者總結⁽⁴³⁾一經⁽⁴⁴⁾。唯四而已。撮⁽⁴⁵⁾其枢柄⁽⁴⁶⁾而授⁽⁴⁷⁾三与⁽⁴⁸⁾之。」と、名・用・体・宗・經の五重玄義に約して釈された。日蓮聖人は『観心本尊抄』に「現⁽⁴⁹⁾三十神力⁽⁵⁰⁾地涌菩薩属⁽⁵¹⁾累妙法⁽⁵²⁾五字⁽⁵³⁾」と述べられた如く、神力品の結要付属とは妙法五字の付属であるとみなし、ここに滅後末法時の教法（妙法五字）とその弘通者（地涌の大菩薩）が明確に定まったとされるのである。

付属は釈尊が釈尊の未来を被付属者に托す重大事である。ゆえに、地涌への付属が釈尊の「予定された事実」であつたとしても、地涌自身の誓願が必要であつたのである。すなわち誓願が付属を實現し、付属は誓願に成就するのである。付属の為に誓い、誓つた故に付属が實現したのであるが、その付属された事柄は誓願者の自覚的主体性のなかに成就するの

である。

三

叙上の如く、日蓮聖人は特に宝塔品・涌出品・寿量品・神力品を中心とした法華經虚空会の説法に、滅後末法を利益し給う教法（妙法五字）とその教法を荷う師（地涌の大菩薩）が出現することの必然性を見られたのである。

神力品の誓願と付属は釈尊在世における三仏と地涌の「約束」である。それは釈尊の未来が地涌の大菩薩に托されたことを意味している。

在世の約束は末法今時においては過去の出来事である。しかし、その約束は末法今時という釈尊の未来に関わるものであつたのである。したがって在世の約束は過去ではなく、釈尊の未来である末法の今日を含むものであつたと言わねばならない。久成の法は常に釈尊の現在として永遠の未来を教益する。その久成の法を久成たらしめる師（地涌の大菩薩）は三仏との約束を履行することこそを最第一の使命としなければならぬのである。

日蓮聖人は「在世の約束」履行の時を「末法今時」と見、その必然性を自己に主体化せられたゆえに、「三世説法の儀式⁽⁵⁴⁾」は「在世は今にあり、今は在世なり⁽⁵⁵⁾」という「一同純円⁽⁵⁶⁾」の世界であるとみられたのである。それは誓願者の自覚、被

付属と誓言（庵 谷）

付属者の自覺に立つた日蓮聖人の法華經であつたと言えよう。

地涌の誓願を自覺し主体化するとは、「在世の誓い」を「末法の誓い」として今日に受領することである。在世における誓願と付属の事實は、末法の自覺者に、末法なるが故に必然的となった誓いの履行を如来の勅命として要請するのである。日蓮聖人は、釈尊の歴史に必然づけられた「末法の誓願」に生きる故に、度重なる大難をものともせず、妙法五字の弘通（立正安国の実現）に生涯を捧げられたのである。すなわち、誓願と付属の事實を自己に主体化（在世の誓願と付属を末法における自らの誓願として主体化）されたところに、日蓮聖人の宗教の行動原理があつたと言っても過言ではないであらう。

- 1 『開目抄』五五九頁（日蓮聖人遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』による）。
- 2 『新尼御前御返事』八六七頁。
- 3 『法師品』三一二頁（妙法蓮華經は『真訓両読妙法蓮華經並開結』による）。
- 4 茂田井教亨著『日蓮教學の根本問題』四五頁。
- 5 『法華文句会本』第二二卷三八丁裏—四四丁表。
- 6 右同 第二二卷四二丁裏。
- 7 『開目抄』五七二頁。
- 8 『見宝塔品』三三四—三八頁。
- 9 『開目抄』五八二—三頁。

- 10 『法華文句会本』第二三卷一丁裏。
- 11 右同 第二五卷五丁表—七丁裏。
- 12 右同 第二五卷八丁表。
- 13 「譬如_レ有_レ人色美髮黑年二十五、指_二百歲人_一言_二是我子_一。其百歲人亦指_二年少_一言_二是我父生_二育我等_一。是事難_レ信」（『從地涌出品』四〇九頁）。
- 14 『法華文句会本』第二九卷二丁表。
- 15 『從地涌出品』三九三—四頁。
- 16 『如來神力品』四九八頁。
- 17 『法華文句会本』第二九卷二丁表。
- 18 「是我弟子_レ広_二我法_一」（『法華文句会本』第二五卷六丁表）。
- 19 「子弘_二父法_一有_二世界益_一」（『法華文句会本』第二五卷六丁表）。
- 20 「付属者此經唯付_二十方涌出菩薩_一。何故爾。由_二法是久成之法_一故付_二久成之人_一」（『法華文句輔正記』第六卷一八丁表）。
- 21 『觀心本尊抄』七一九頁。
- 22 『法華文句会本』第二九卷一丁表。
- 23 『如來神力品』五〇二頁。
- 24 同上 五〇二頁。
- 25 『法華文句会本』第二九卷六丁裏—七丁表。
- 26 日蓮聖人は壽量品の「是好良藥」の文を「壽量品肝要名体宗用教南無妙法蓮華經是也」（『觀心本尊抄』七一七頁）と積されている。聖人は、天台大師の五重玄義は末法時においては「南無妙法蓮華經」となるとみなされたのである。
- 27 『觀心本尊抄』七一七頁。
- 28 『寺泊御書』五一五頁。
- 29 『種種御振舞御書』九七一頁。
- 30 『觀心本尊抄』七一五頁。

（立正大学助教授）